

どっこい生きてます!



秋晴れの下、東京・新宿で恒例の「リカバリーパレード“回復の祭典”」(第8回)があり、潮騒JTCから入寮者約60人が参加してパレードの盛り上げに貢献しました。女性を含む潮騒エイサー隊がパレードの先頭を担い、沿道の市民から注目されました。一方で参加者の減少など難しい問題も浮き彫りになり、今後の運営に課題を残しました。(4、5ページに関連記事)

2017

10

潮騒版

リカバリーパレード 実施の意義について



次第に寒さがつり、例年よりも早く秋の深まりを感じます。皆様お変わりありませんか。本号でも報告されているように、第8回「リカバリーパレード『回復の祭典』」(10月8日、東京・新宿)があり、潮騒JTCからも約60人が参加して盛り上げに一役買いました。ここ数年、私自身は都合で参加できていませんが、潮騒ではその趣旨に賛同して2010年の第1回から参加・協力しています。鹿嶋の地から都心まで、入寮者が車に分乗して大挙して駆け付けるには苦勞も多いのですが、得るものも大きいです。苦勞の甲斐あって実行委員会の皆さんからも信頼されるようになり、今では潮騒が重要な戦力? になりました。継続こそ力です。これを踏まえ来月開く潮騒12周年フォーラムでは「リカバレ」仲間の皆さんの力添えて、試験的ながら鹿嶋での「アクションパレード」に挑みます。従来の室内パフォーマンスに、潮騒独自の「リカバレ」をドッキングさせ、潮騒の入寮者が積極的にまちに出て回復をアピールしようという訳です。

本コラムでも何度か私の思いを明かにしていますが、私達アディクトは世間から社会の落ちこぼれ、反道徳的な悪人という否定的なレッテルしか張られてきませんでした。悲しい事に当事者である私達もそう思い込み、人として生きる自信を失い、自暴自棄な再発(スリップ)を繰り返して、依存症という困難な病気をより悪化させる蟻地獄に嵌(はま)っていたのです。家族や周囲を巻き込みながら不幸を招く私達のような厄介者に、世間は冷たい視線しか浴びせません。このため私達は家族も含め「助けてほしい」と自分達から声を挙げることを憚(はばか)られてきました。この国には長く依存症を病気として認知する土壌が形成されず、犯罪として社会的に指弾されるしかなかった負の歴史があります。「好きで酒浸りの人生を送ってきたくせに」「勝手にヤク中になって今更助けを求めな」「家族と自己責任で治せ!」という自業自得を指摘する声は隠然たる影響力を持っています。

でも、どうかその前提を疑ってください。病気なら迷わず治療が真っ先に求められるはずです。「お前達は犯罪者だから刑務所へ行け!」という市民感情の裏には、この問題についての根本的な誤解と無理解の歴史があります。そのことを当事者自身が、あえて都心で訴え続けて8年。リカバリーパレードはごまめの歯ぎしりのような小さな試みながらも、この国で初めて当事者自らが声を挙げた意義ある取り組みです。次第に地方へも波及し、今年は7都市で開催されました。地道な広がり半面、本家・新宿でのパレードは参加者が漸減傾向にあり、私には胸突き八丁に差し掛かっているように見えます。相変わらず沿道の人達からは「何のパレードなの?」というキワモノを見る奇異な視線を感じますが、都心の秋空を仰ぎながらアディクトを公言し胸を張って回復できる事をアピールすることは、とても気持ちがいいものです。目の前に立ちはだかる厚い壁を少しずつでも取っ払うためにも、潮騒でもフォーラムと肩を並べるくらいに初めて取り組むリカバリーパレードを盛り上げたいのです。たった30分ほどですが、深まりゆく秋を感じながら皆さんも一緒に鹿嶋路を歩きませんか。

(センター長 栗原 豊)



▲メンバーのスリップ問題は、農業隊といえども当事者の回復が第一で、農業は二の次、三の次でいい事を教えている

～ 仲間の回復を見捨てる事は自分の回復を見捨てる事～

今年取り組んでいる新規事業の稲わら作りですが、天候不順もあってなかなか思うように行きません。日干し作業が終わり次第、施設の倉庫に保管し、納豆の藁苞(わらづと)加工に入ります。あくまで今回は試験的な試みなので、失敗しても翌年に繋がればいいというスタンスで考えています。コメも合計140袋(一袋30キログラム)を取穫でき、潮騒食堂への提供と施設での自家消費1年分を賄えそうです。そうした活動とは別に農業隊スタッフにもいろんな動きがあり、相変わらず悪戦苦闘しています。

先頃、一定のクリーンタイムがある農業隊スタッフに車の免許を取得してもらったのですが、車ごと逃亡?されてしまいました。ギャンブル依存症の彼は以前にも同じトラブルを起こした事があります。無一文になり、なんと都内から徒歩で潮騒に戻ってきたつわものです。今回も数週間で戻ってきたのですが、アディクトにとってスリップ問題をどう乗り越えるかは一番の難しい課題といえます。その半面、別のスタッフは過去にシンナー依存で故郷の私立高校を中退した反省から、鹿嶋市内の定時制高校で新たな学びを決意し、昼間は農業に取り組み、夜間は勉強に頑張る毎日です。以前にも農業隊の中心メンバーが県立農業大学校で農業研修を受けましたが、仲間の中に学びの機運が広がっていることはとても良い事です。

初めてといえば、施設第1号の有給職員が農業隊のスタッフ仲間から誕生しました。職を得ての社会復帰とは別に、今後の施設運営を担う人材の育成も潮騒の課題なので期待されていました。しかし、長期のクリーンタイム

を維持してきた彼ですが、その重圧から間もなくスリップして躓いてしまいました。私から見ても、彼は良い回復をしている手本であり、農業隊の中心的な存在だったので、さすがの私も一時期とても落ち込みました。農業隊にもダメージが大きかったのですが、何よりも当の本人が一番つらかったと思います。「スリップは回復への避けられない必要悪」「罰を与えるのではなく立ち直りのチャンス」(栗原センター長)の教えに習い、しばしの休養期間を経て彼に現場復帰を促しました。今では一緒にミーティングに参加でき、一緒に農作業ができるまでに回復しています。農業隊といえども農業が絶対条件ではなく、あくまで回復のためのツールにすぎない、当事者の回復が第一で、農業は二の次、三の次でいいのだ、と教えられました。

彼のスリップ問題も依存症の回復がいかに困難であるかを深い部分で示しています。でも、災い転じて福となすではありませんが、今後に生かせる貴重な教訓です。依存症の回復で大事な要件は12ステップ、ミーティング、仲間の三本柱なのはもちろん、仲間に寄り添う事なのだと思います。再び「どん底」を経験した仲間、打ちひしがれている仲間の側に、ひたすら寄り添う事だと気づかされました。仲間の回復を見捨てる事はすなわち自分の回復を見捨てる事だと教えられました。「仲間のスリップに感謝…」と言いたいところですが、未熟な私はそこまで自信を持つては言えません。でも、いつかはその言葉が違和感なく口に出せるように、日々「今日一日」の精神で頑張ります。(農業隊リーダー：ヒトシ)



リカバリー・パレード

潮騒サポーターの地元ジャーナリストがリカパレの課題を指摘
参加者の減少を食い止め、市民の関心を促す PR 面での工夫を

第8回リカバリーパレード「回復の祭典」に取材者として参加してくれた、潮騒JTCサポーターのサッキー(崎山勝功さん、「NEWSつくば」スタッフライター)が、今後の運営の参考になればと以下の提言を寄稿してくれました。

◇ ◇ ◇

今回のリカパレ取材して、いくつか気になった点がありました。まず今年の参加者数が約140人(主催者発表)と少なかったことです。パレードは2010年から東京で始まり、今年は大阪、広島、仙台など全国7カ所に拡大し、各地で行われるようになったのはいいのですが、首都・東京でのパレードは減少傾向にあるのが気掛かりです。見た限り主な参加者は潮騒JTCの入寮者や東京断酒新生会の会員などですが、関東各県にはダルクがありますし、茨城県内にも「つくばね断酒会」(土浦市)があるので、各団体への参加呼び掛けに力を入れる必要性を感じました。今年の一部の新聞にパレードの紹介記事が掲載されていたとのことですが、メディア向けのプレスリリースを作って配布するなど積極的な売り込みの努力が主催者側に求められそうです。

また、パレード警備に当たる交通警察官の対応が気に

なりました。スタート時刻が予定より少し遅れたとはいえ、パレードの先導に当たる警察官が「ドライバーが待っているのですから早くしてください」と複数回に渡って警告するのは考えものです。参加者の中には高齢者など身体が思うように動かない人たちもいるので、あまり急かすような警告はかえってパレード参加者がけがをする原因にもなりかねません。都内は茨城県と違って交通量が多く、パレードコースに当たる新宿中央公園からJR新宿駅周辺までの区間は特に交通量が多く、約140人のパレード隊に20~30人ほどの警察官を配置するというのは、やや物々しい感じがしました。警視庁側の過剰に映る警備は、沿道の市民から「何だから分からないけど怖そう」という、誤ったイメージを持たれる原因にもなります。

パレードでは沿道の市民に向けて「依存症は回復できます」などアピールし、薬物・アルコール依存症や心の病に対する偏見を無くすよう訴えたのですが「どこまで市民に伝わったのかのかな」と考えてしまいました。パレード取材中に市民の様子を観察したのですが、一部の人たちから「うるさい」「何だかキモい(気持ち悪い)」などの声が聞かれ、パレードの趣旨が十分に伝わっているとは

言い難い様子でした。都内ではほぼ毎週のように様々な団体がデモやパレードをしているのですが、「デモ疲れ」というべきか、デモ行進そのものに嫌悪感を示す市民が一定数います。一方で外国人観光客はパレード先頭の潮騒エイサー隊に盛んにカメラを向けるなど、概ね好意的な受け止め方でした。

今後は市民が興味を持って見てもらえるようリカバリーパレードを念頭に、内容を工夫してもらえればと提言します。そのために、薬物使用経験のある芸能人に参加してもらって、パレードの注目度を集めるのも一つです。ダルクで回復の道を歩む元タレントのマーシー(田代まさし)さんらがパレードに参加すれば、市民に「依存症は回復できる病気」「本人の意志ではなく『脳の病気』」という正しい認識を広めるきっかけにもなると考えます。そのことが、強いては本人たちの回復にもつながると思います。

(サッキー)



楽しく歩いて 強く依存を認めることができた

以前にテレビで見たことがあるパレードに行きました。仲間に促されての参加だったので最初は何の団体かと不安がありましたが、歩き始めて少したつたらとても楽しくなりました。歌とかも心に伝わる歌で胸が苦しくなり、私もそうなんだ、と強く依存を認めることができました。今までにない経験をさせてもらいありがとうございました。



依存症で苦しむ皆に 何かメッセージを運べたら

私にとってリカパレは初体験でした。今回の参加に当たっては、いろいろな思いがありました。私はこの施設に来た当初から、テレビはもちろんのこと、顔だけでなく声さえ出すことも拒んでいました。家族のことを考えると、施設にいたことが恥ずかしく、依存症であることを誰にも知られなくなかったからです。でもこの2年3カ月が私を少しずつ変えてくれました。

なので今は、この「るみの家」にいることを誇りに思っていますし、依存症で苦しむ皆に何かメッセージを運べたらと思っています。私でも立ち向かえる、変わる。さみしくないということを伝えられたらと思い、笑顔で歩いてきました。私には家族や仲間がいて、支えてくれて心から感謝しています。来年も機会があつたら参加し成長している姿を仲間たちに見せられたらと思っています。すてきな体験をありがとうございました。



パレードの一体感と 充実感がとても良かった

私は潮騒に来て3カ月少々、好天の秋空のもと初めてリカバリーパレードに参加しました。慣れ親しんだ東京の、それも新宿ということで嬉しく心弾み思っていました。中央公園に着くと様々な人が多数いて、スタート前を皆さん楽しんでいました。私はこういう経験がないため、少し緊張しつつ楽しみました。まず感じたのは皆さん「楽しんでやろう」というスタンスだったことです。

そして思ったことは「一日のこういう体験というのは区切りがいい。生き方を守ってまた発散して楽しむもんだな。今日のこの日が少しでも長く続けば幸せになる。心が荒れていては損。楽しんで広めよう。人は何か意義を持つていれば、それだけで何か見えるものがある。たぶん心の幅は小さいけれども必ず広がる」です。鮮明に覚えています。何十人ものパレード参加者が1つになる。パレード前の雰囲気、パレードが始まって終わるまでの一体感と充実感。とても良いものでした。警察官のリードにも素直によく聞きパレードができました。新宿という一種多様な街の中で達成感を抱けました。又来年参加したいと思っています。ありがとうございました。



仲間との再会に魂の 深いところでの繋がりを自覚

リカパレも今回で8回目、気がつくとい時間ながたっています。今年は自分たちのフォーラムでもパレードをしたいとの思いから、早い時期から(実行委員会に)参加させていただきました。いつしか自分も潮騒ではオールドタイマーの部類かなとは思いますが、何せ重症のアディクトとあってなかなか思い通りにはなりません。栗原センター長や先行く仲間の真似をしてみても中身が足りなくて四苦八苦です。

そんな中今年も、自分がプログラムにつながった当初のスポンサーとの再会もありました。こうした仲間との再会は、自分自身をとて勇気づけてくれます。過ぎ行く時間と場所を越えて互いに生きているという実感を抱き合い、魂の深いところでの繋がりを自覚させられます。今年は天気にも恵まれ、始まってしまえばアツという間の出来事でした。これから潮騒はフォーラム本番を迎えます。東京や千葉、神奈川地域のメンバーもフォーラムに参加していただければ幸いです。当日は何が起こるのでしょうか。今から楽しみにしています。

近藤恒夫
インタビュー
~ダルクの32年・逆説の人生に光を求めて~

ダルクは人を正すのではなく、
間違いに寄り添っていく居場所だ



連載
第4回

「ダルクをやって何が面白いのかな？」
と俺が迷う

—近藤さんが始めた当事者活動としてのダルクですが、その流れを受けついで無認可団体のままのダルクは今や少数派となり、数えるほどじゃないでしょうか。近藤さんがニュートラルな独立ダルクの立場を堅持できたのは、やはり支援の構造が大きかったですか？ロイさん（神父）やカトリック教会の下支えと経済的な面での支援が…。

近藤 大きかったね。でも、俺の生き方ははっきりしているね。「やってもダメなら諦めよう」、「嫌ならやめればいい」と。なにしろ途中でやめてしまうのは得意だからね（笑）。開き直る訳じゃないけど、それが俺の流儀。理屈つけて、無理やり自分を何かに合わせようとは思わない。そんな形で無理して続けていたら、間違いなく俺自身が潰れてる。でもね、俺、時々思うんだよ。「ダルクをやって何が面白いのかな？」って。創設者の俺が迷うんだから、他のみんなだって「これでいいのかな？」っていう不安や戸迷いは隠せないと思うよ。

—それは近藤さん得意の逆説の妙だと僕らは捉えませぬ。こんな事を言うと叱られるかもしれないけど、近藤さんほどの器ならダルクをテコに金儲けしようと思えば出来たんじゃないですか？社会にはびこる貧困ビジネスとは違う形でね、正統派の依存症ビジネスだって可能だったんじゃないですか？まあ、どう頑張っても依存症の回復支援事業なんて、そんなに金にはならないでしょうが…。そうじゃなくて生涯ボランティアの道を貫

いたのは、近藤さんの中にお金には代えられない何かがあるからなんですよ。

近藤 そんなたいそうなものじゃない。確かに、こっちの方（今の形でのダルクの運営）が、俺にとってはピッタリくるというか、居心地がいいということはある。これも不思議なんだけど、俺の活動スタイルが好きな人には、みんな国からお金もらおうという発想をする人がいないんだな。何かあったら自分の責任問題でやるよ、とね。それは潔いし、誇ってもいいんじゃないか。

ダルクには場違いの人達が
どうしても一定教流れ込む

—それこそ自主自立・非管理主義ですね。

近藤 そうしたイデオロギーみたいな感じで言われるとこそばゆいが、俺は自分が楽なやり方をしてきたにすぎない。あまり意味付けされるのは好きじゃないんだよ。ところで思い出したんだが、かつてダルクの仲間が近くのコンビニで万引きして問題となったことがあった。知っての通り、仲間の中には病的な窃盗癖というか薬物やアルコール欲しさに万引きする奴らも結構いる。

いろいろ対策を講じたんだが、根本にあるのが嗜癖行為というか、そういう種類の病気の誤だから、根幹の治療をしないでいくら規則を強化して乗り切ろうとしてもダメだった。結果的に近くのコンビニが2店舗閉店したんだが、まあ、実際には経営上のいろんな問題が背景にあったんだろう。後味は良くないわな。責任を感じるよ。申し訳なかったと今でも思う。当時、店主には「万引きしたお金は返しますから」って平謝りしたけどな…。

—それって大なり小なり各地のダルクが悩んでいる問題でもありますよね。そうした病理にきちんと対応できる回復施設がないから、どうしてもダルクに流れ着いてきますよね。

近藤 宿命なのかもしれないが、ダルクではそういう人々を一定数抱え込んでいる。みんな生活保護だしな。中にはダルクの事情を分かってくれる店長もいたよ。でも、「万引きはあくまで窃盗犯罪。間違いだ、魔が差したからでは済まない。社会のルール上それは許されない」というのが大半だね。当たり前なんだが…。

—そう言われれば反論の余地はありません。依存症という病気が犯罪行為の免罪符にはならないというのは正論です。でも、反論を許さない絶対的な物言いからこぼれ落ちるのがダルクの人達の実態ですよ。

近藤 俺達は、一歩踏み込んで「ダルクは人を正すのではなく、間違いに寄り添っていく居場所だ」と考える。それは世間の常識とは決定的に異なる立場かもしれない。実際、俺達の考えは世間になかなか受け入れられないけどね。でも、実際に間違うんだから、仕方がない。だって12、3歳でシンナー吸ってね、少年院、刑務所に行ってる。ある意味では、世間の常識にうとく社会経験もないまま、そうして生き延びてる人達、その人達に「間違っちゃだめだよ!」というのがおかしい。

—そこまで言うんなら、国が得意の自己責任に任せるんじゃなく、当事者をきちんとフォローする社会的な仕組みを作るべきですよ。その方向に社会全体が合意形成すべきじゃないかと思います。

近藤 でもダルクの常識は世間の非常識だから、なかなか世間には通じないな。悲しいかな、それが現実だ。

人に迷惑をかけずに生きられる人なんかこの世にいるか?

—その問題の背景は、日本社会がもつ共依存性や過剰な世話焼き、他人に迷惑を掛けてはいけないとする過剰な倫理観、間違いを認めない、やり直しを認めない不寛容な風土を感じますね。あたかもダルク設置に反対する根拠にもなっている。それに伴う連隊責任と相互監視、結果的に依存症の回復には手ごわい課題ですね。

近藤 とにかく他人に迷惑をかけてはいけない、子供の頃からそればかり口酸っぱく言われる。でも、人に迷惑をかけずに生きられる人なんか、この世にいるのか? 行き着く果ては「お父さん、お母さんごめんなさい。生きててすいません。自分は迷惑をかけて生きるような人間だから…」と自分を追い込むようになる。

栗原 私も潮騒の家族会に参加していて、いかにそうした訳の分からない理不尽な圧力によって家族が苦しんできたかを思い知らされています。依存症の家族は真面目過ぎるのか、親が子供の負の荷物をすべて背負い込もうとする。尻ぬぐいの果てに追い込まれて行く。でも、運よく家族会に繋がり、少しずつ先行く仲間の家族の話に救われて、何とか荷物を軽くすることで、自分達の新しい人生を切り開いていける。当事者の回復とは別に、やはり家族も救われなければいけない。お互いが重い鎧を外して身軽に、楽に生きられるためにも家族自身の回復も必要ですね。

日本には自分の財産を次の世界に手渡す発想はない

—そう考えると、ある意味でダルクは日本型家族へのアンチ(反対)を主張してきた面があるように思います。その一方で、今や日本では浪花節的な親孝行はもちろん、昔風の大家族や家父長制はすっかり立ち消えました。少子高齢化、核家族化で古い家族像は実態としてどんどん壊れているのに、家族を縛る理不尽な正体不明の圧力だけは、なぜか色濃く残っている。新しい家族像が求められるのに、なかなか新たな家族ビジョンが生まれません。それだけにダルクの打ち出す家族の回復ビジョンは出色だと思います。

近藤 何だか難しい話になったね。そういえばそう言えるのかもしれないな。でも、よくいるだろう。意味も分からずに「愛ある突き放し」とか知ったかぶりする連中が…。俺、本当かな?と思うよ(笑)。家族の突き放しでなく“突き倒し”ではないか?なんてね(笑)。

—やはり家族という枠組みの前に、神と自分の関係がある欧米のキリスト教風土との違いを実感させられます。日本は自分よりも家族がすべて。本来なら自由なはずの個人の生き方さえも家族のために収められるような、倒錯した社会構造ですからね。親殺し・子殺しは日本特有の家族の病理現象でしょう。

近藤 ビルゲイツではないけど、自分の財産を次の世界に手渡すという壮大な考え方は、どう転んでも日本にはないわな。日本の大企業の経営者にはないだろうなあ。日本人の感覚はお金は貯めるもの、それも自分のためではなく家族のため、家族のために少しでも多く財産として残そうとする。そのために懸命に働いて努力する…、おかしいだろう、その考えって。おかしくないか? 誰のために生きるのか、家族のために自分の人生はあるのかね。

(司会進行・広報部、次号に続く)



依存症者でも社会で磨いた腕を生かさない手はない!?. 栗原センター長の熱い思いが実を結んだのが、鹿嶋市役所前にある潮騒食堂「おらげのかまど」です。潮騒農場直営の食事処で、朝採れの新鮮野菜を使ったヘルシーなワンコイン定食(500円)が人気メニューです。障害者総合支援法の就労継続支援B型の指定事業所の指定を受け、潮騒JTCの就労支援事業の一翼を担っている点で地元でも異彩を放っています。現在は2代目店長としてノン・アディクトのヒロさん・ミカさん夫妻が店を任されて、過去に飲食業界で働いていたベテラン入寮者や意欲ある女性ハウスのメンバーらが就労支援プログラムの一環として日々、楽しく働いています。

これまでダルクにおける社会復帰を目指す就労支援の取り組みでは、自分達の病気(依存症)の再発に繋がるとして、過去に社会で働いていた時とは異なる仕事や職業指導を促す傾向があります。でも、アルコール依存症の仲間が多い潮騒では、彼らの大半が社会経験の少ない薬物依存症者とは違って、過去には腕のいい職人として信頼されていたり、専門職の資格を持っていたりすることから、日々のミーティングを保障するなどソフト・ハード両面からスリップ防止の環境を整えながら、前職を生かす形で就労支援・職業訓練プログラムに力を入れています。その代表格がソフト面では農業隊であり、ハード面では「おらげのかまど」です。

かまどは依存症者の職業訓練・就労支援のプログラム開発を目指して取り組んだ助成事業「潮騒ファイザープロジェクト」(2011~2013年)の成果を生かし、市役所前の空き店舗を入寮者らも改装工事に関わって2014年11月にオープンしました。初代店長は居酒屋の経営経験が長かったアルコール依存症のハルさんが務め、現在

の運営スタイルの基礎を作りました。潮騒水田で収穫した美味しいコメと潮騒農場で朝に採れた四季折々の新鮮野菜を食材に生かした“おふくろの味”が特徴で、健康食野菜としての青パパイア料理も手掛けています。また豊富な小鉢も揃え、ラーメンなど中華メニューや弁当の注文にも応じています。午前11時~午後2時の昼時間限定の営業ですが、潮騒の仲間達はもちろん、地元の固定客も増えています。

ハルさんは諸事情から1年半前にリタイアしましたが、店を受け継いだヒロ&ミカさん夫妻が奮闘しています。栗原センター長は「ここ数年は試行錯誤が続いたが、少しずつ市民に浸透しつつあり、どうやら私が思い描いた形になりつつある。できれば当事者だけで店を仕切れるのが理想だが、アディクトはスリップの危険性をいつも念頭において6、7割の頑張りで良しとしなければいけない。だから、すべてを求めるのではなく、今のように健常者が柱となった就労支援事業のスタイルが経営の安定化に繋がるように思う。かまどの運営も当事者は“半就労半福祉”の原則が丁度いい事を実感している。チャンスがあれば第2の店舗進出に挑みたい」と話しています。

※店舗名の「おらげのかまど」は、鹿嶋地方で自分たちの食堂を意味します。



独協医大生が潮騒の回復支援活動に理解深める

映像や当事者の体験講話を通して依存症の実相に触れる



潮騒JTCでは今年6月に実施した、つくば市の筑波大学医学部生の研修受け入れに続き、9月22日にも地元保健所を通じて獨協医科大学(栃木県壬生町)の医学生による施設研修がありました。今回研修で来所されたのは同大医学部5年次生の3人と、受け入れ窓口の地元保健所職員2人の計5人の皆さんでした。約2時間半ほどの滞在でしたが、日頃は体験できない依存症の支援活動の一端に理解を示し、新鮮な印象を持った様子でした。

一行は、潮騒の活動拠点である鹿嶋市宮中のデイケアセンター(潮騒アディクションビレッジ会館)で潮騒についてのDVD映像を視聴しながら、当事者の講和に耳を傾けました。この日は、農業隊メンバーのユウさんと百寿亭代表のマコトさんが体験談を話し、二人とも薬物(覚せい剤)依存などで長く苦しみ、「人として生きていくことができなくなった」としながらも、「潮騒に繋がってやっ

と依存症のアリ地獄から救われた」と明かしました。栗原センター長も自身の薬物やアルコール依存の履歴を忌憚なく話し、「こんな重症の私でもダルクで救われた」と話しました。60歳で新たな人生をスタートをさせてからは回復プログラム(12ステップ)の教えに従い、同じ依存症の仲間の回復を手助けをするために潮騒を立ち上げたことを力説、潮騒の活動を紹介しながら「病気は刑罰では治らない」と強調しました。農業隊リーダーのヒトシさんも、潮騒の就労支援の中核をなす農業の活動を、スライド映像を通して笑いを交えて話しました。

参加した学生からは「初めて覚せい剤を使った時の感覚はどうだったのか」「一回やったらもうやめられないというが、本当なのか」「抜け出すまでにどれくらいかかるのか」「後遺症が残っている人は精神科で治療を受けるのか」などの質問があり、ヒトシさんが丁寧に答えました。最後に学生の代表から「依存症の皆さんから話を聞く機会はめったにないので、とても勉強になりました」との謝辞を頂きました。栗原センター長は「できれば皆さんには精神科医の道を志してもらい、依存症治療に役立つ人材になってほしい」と期待を寄せました。

この後、一行には潮騒食堂「おらげのかまど」に移動して昼食をとってもらい、潮騒農場で収穫した新鮮野菜を食材にした定食料理などを直に味わって頂きました。

赤い羽根共同募金で下津施設などにエアコン設置

平成28年度の赤い羽根共同募金の募金配分(広域助成)の恩恵により、潮騒JTCの下津ナイトケア施設(鹿嶋市宮津台など)へのエアコン設置工事が完了し、入寮者が快適な環境で依存症の回復に向けた生活を送れるようになりました。NPO法人・潮騒が施設環境の整備に向けて助成申請していたもので、平成25、26年度に続いて3回目の有難い交付措置です。因みに同募金会によると、今回(平成28年度分)には合計56団体が選ばれ、交付を受けたそうです。

今回潮騒では空調設備工事として関連の2施設(グループホームゆたかの里、下津ナイトケア施設の本造部分)にエアコン計17台の設置を申請し、このほど業者による設置工事がすべて終わりました。これにより両施設は快適な生活環境となり、入寮者の共同生活の円滑化、安定した回復プログラムへの取り組みが可能となりまし

た。特に増加傾向にある高齢の仲間には朗報で、栗原センター長は「民間の潮騒は財政力が弱いので居室のエアコン設置が課題だった。いつもながら赤い羽根共同募金様の温かい助成措置には有難い限りです」と深く感謝していました。



受刑者からの手紙

ボンクラの自分が 潮騒に行ってもどうか仲良くして

便り有難う御座います。丁度、来週辺りにお便りしようか、と思っていたら“タイミング良く”便りが届きました!! “新米祭り”ですか。お米運び、お疲れ様です。私も銀シャリ食べたいです(笑)。自分の残刑もようやく残り6カ月半となりました。あと少しです。自分も早く皆と協力して、何かをしたいです。シゲさんはカメラマンですよ!! 恰好良いですね!!! 自分は何の取り柄も無い“唯の”ボンクラなので、皆の足手まといに成るだけかな? まあ、何かしら出来るかな…? こんなボンクラの自分が潮騒に行っても、どうか仲良くして下さい。とことん無力な依存症者なので、どうか“イジメ”ないでくださいよ(笑)。“学びは苦でなく、喜び”なんですね。確かに“継続は力なり”ですよ。自分にも色々と学ばせて下さい。

(東京都 T・S)

潮騒通信を読むと施設の 雰囲気伝わり励まされる

お手紙を有難う御座います。先月、潮騒通信が届きました。有難う御座います。ここでの生活は対人関係に苦労しますが、施設の雰囲気が伝わる潮騒通信を読むと励みになり、出所の日が待ち遠しい気持ちに成ります。先月、私は誕生日を迎え、46歳に成りました。最近になって老眼が進んで来て、刑務所ではロール型のトイレットペーパーが無いので、ちり紙を1枚ずつ数えるのが大変です。シャンプーも購入出来るようになったので、これでやっと他の受刑者と同じ生活に近づきました。ここでの生活は大変な事ばかりですが、頑張っていきたいと思います。(北海道 K・M)

少しでも社会人らしく真っ当に生きていきたい

潮騒ジョブトレーニングセンターの皆さん、お元気ですか? 毎回シゲさんからの便り、有難う御座います。お祭りやボランティア等で忙しそうですね。私も仲間から「焼きそば」を頂いて楽しんだものです。また「三線の歌」での小太鼓の舞いをそちらの仲間達が練習している姿を拝見させて頂いています。懐かしさが今も音にして聞こえてくるようです。

秋到来、畑での収穫祭は今年、どうでしたか? 私がいた頃はビックリする程の量のサツマイモが穫れる事に驚いたものです。新たな野菜のレパトリーも増えた事でしょう。私もアパートの庭に少しばかりの野菜作りを真似てみましたが、やはり畑には、「それなりの土・肥料・適度な愛情」がなければ、良い野菜は育ちません。“隣の庭は良く見える”と言いますが、それは間違い。毎日いつも手掛けた土作りをしなくては良い物は育ちません。今は私はここ刑務所内で横着ながら、“仕事隊として”頑張らせて頂き、良い勉強をさせて頂いています。8月18日に行われた「潮騒夏祭り交流会」のナイトごとの練習には私は感動いたしました。またこれからも、様々なイベントにて皆さんの力を尽くし意欲を出し切ってください。

依存症という病気の仲間達に感染する物事は些細な事からです。いつも気を緩めずに社会復帰に向けて励んで下さい。私の方は、11月頃には判決を頂くと思います。今、その時の証人への文面も弁護士等へ出して貰っていますので、その頃に採決する事でしょう。これから徐々に寒くなっていきますが、私もこの先を乗り越え頑張っていけますので、仲間の皆様もより一層頑張っていきたいと思います。それではこの辺りでペンを置かせて頂きます。

(広島県 M・T)

受刑者の皆さんからの手紙から強く感じられるのは、塙の中では外の世界とのコミュニケーション渴望がいかに大事かという事、そして自分を気に掛けている人がいるという事がどれほど生きる希望に繋がっているか、それらを改めて思い知らされています。潮騒が皆さんにできる事は限られています、本人が求める限り依存症回復への支援は惜しみません。

潮騒について分からない事だらけなので教えてほしい

いつもお手紙を頂きまして誠に有難う御座います。“「潮騒ジョブトレーニングセンター(栗原豊)さん」とは、特別発信という手続き”で、やり取りしています。今回、3回目の返信ですが、同じ手続きを経て行っておりますので、遅くなる事をお許し下さい。毎回のお手紙には、受刑者の皆も物凄い感謝をしています。

センター長やシゲさんからは毎回勇気と、これから先の人生へ向かっての“希望”を頂いております。これからも受刑者の皆さんに対して、生きる希望と勇気を与え続けていって頂ければ幸いです。

個人的な疑問ですが、そちらに入寮している利用者が毎月私用で遣える金額は幾らですか? 月1回の買い物プログラムで何を買えるのですか? 予算は幾らですか? 生活保護は可能ですか? 退寮した人達はどのような仕事を始めていますか? お風呂は? 食事は? 電話や手紙は×とありますが、どうしてですか? 仕事は何故させて貰えないのですか?

刑務所にもダルク(DARC)に行っていた人が沢山います。皆共通するのが、強い安定剤を沢山、まるでお菓子の様に飲んでる事です。私は長く接見禁止の間、眠剤と安定剤に頼りましたけれども、今は止めています。止める時、とても勇気がいりました。しかし、また飲むと止める時が辛く、不安です。飲まなければいけないのでしょうか? 薬物依存の治療は回復施設の運営上、生活保護を受給する必要上、病人となり患者になるのが不可欠でしょう。でも、止めないと仕事にも就けないうし、止めた時1カ月くらい自律神経がバラバラになるし、ともするとドクターから離れられなくなり、処方医の飼い犬になってしまうような気がします。飲まない方法はありませんか? ケンカ・論争・派閥・逃走・犯罪等、ありますか? TV等は観られるのですか? 新聞は何紙見られるのですか? 鹿嶋市宮津台とはどの辺りでしょうか? (長崎県 U・S)

雨天が多く運動会の練習が殆ど出来ていないのが現状

実りの秋に入りましたが、栗原センター長、シゲさん、そして潮騒の皆様方、如何お過ごしでしょうか? お変わりはありませんか? お手紙、届きました。いつも気に掛けて頂き、本当に有難う御座います。9月16日に「JA新米祭りが行われた」と書いて有りましたが、もう今年の新米が穫れたのでしょうか? 天候不順が続いていたので心配していましたが、良かったです。「皆さんで露店を出して、かき氷やポップコーンを作って配り、米袋を担いだりした」との事で、お疲れ様でした。来月の「どっこい生きてます」に写っているであろう、シゲさんの写真を楽しみにして居ますネ!! 私方の報告ですが、この所雨天が多く、外での運動が満足に出来ない為、運動会の練習が殆ど出来ていないのが現状です。

私は競技で参加予定でしたが、「旗持ち」、「工場プラカード持ち」にての参加にしようか、とも考えています。ユニフォームの数量の関係で競技参加は、後輩に譲り、昨年同様“応援団”に抜擢されてしまいました(泪)。今年は目立ちたくなかったのですが、嬉しいような、ガツカリのような。(笑) ですが選ばれた以上、全力を尽くし、昨年が続いての「フェアプレー賞」、そしてその応援によって、刑務所最後の思い出に優勝を勝ち獲りたいと願っています。

「懲役に良い加減は無い」といわれますが、ついこの前まで「暑い暑い」と、思っておりましたが、今はもう、とてつもなく寒く感じて、“布団や長袖の服が早く入らないか”と、一日千秋の思いで待ちわびています。長く閉じ込められていると、どうしても愚痴が多くなって仕舞うようです。外の世界もこれからどんどん寒くなって来る、と思いますが、どうか風邪等(刑務所では流行っています)を引かない様に、御自愛頂きたい願います。(神奈川県 U・T)

しおさい俳壇

10月のお題

秋

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.45

センター長 栗原豊

前回、最後の部分で私のスポンサーであるトムさん(渋谷ダルク理事、坪倉洋一氏)に触れた。彼は私より若い年齢だが、ダルクにおける優れた回復者の一人である。その出会いは7度目の懲役刑が決まる判決前の未決拘留期間の文通だった。当時、私は逮捕された警察の留置場でアルコールと薬物依存症の後遺症に苦しんでいた。苦しみの中でふと姪に教えてられていたダルクの事を思い出し、藁をもすがる思いで日本ダルクに「助けてほしい」と手紙を出した。そして返ってきたのがトムさんからの、以下の便りだった――。

「前略 私も栗原様と同じような過去を持っています。どうしても薬が止まらず、家の者達も離れてゆき、何ともやり切れない寂しい日々でした。しかし、薬(アルコールと共に)を止め続ける事ができ出してから、新たに関係を持てる人達が一人、また一人と増えてきています。また、久しく会うことのできなかつた人達とも再会する事ができて、新しい関係が広がってきています。私も五十代にしての再出発でしたので、何とも心細い限りでした。が、若いうちでなくてもやり直す事はできるのだという事を実体験しています。私にできている事ですから、栗原様にも必ずできると私は信じます。また、ダルク以外にも薬、アルコールの問題を抱えた年配の人達の集まるマックという施設もあります。出所後はそのような施設を利用するという事も一つの案としてあると思います。余計な事かもしれませんが、考えてみてください。その他にも何かお聞きになりたい事がありましたら、答えさせていただきます。持て余すほどの今のこの時間を、どうぞ今後のご自分のためにたっぷりと使ってください。拘留所に移りましたらまたご連絡ください。寒さも厳しくなっています。お体に気を付けてお過ごしください。日本ダルク：近藤恒夫／坪倉洋一／スタッフ一同」

この手紙を読み終えた時、私は留置場内で小躍りして喜んだ。絶望しかない最悪の状況に一筋の光明が差し込んだような思いだった。(次号に続く)

立冬や文に温もる牢のなか／文の来て牢の窓辺の小春かな

綿菓子や
似ているやうな
秋の雲

びのこ

綿菓子は縁日や祭りの出店に懐かしく、今でも子供達や女学生に人気がある。白や桃色があるが、白のふっくらしたのは如何にも雲の様で心が和む。因みに電気式の機械は一八九七年米国のモリソン、ウォートンの両氏の発明と言われる。子の日が懐かしい句です。

寅さんの
妹思ふ
秋祭

ひろ

寅さんは「男はつらいよ」の車寅次郎のこと、フーテンの寅とも言い、渥美清の当たり役でもある。テキ屋の寅さんがあちこちの村や町でマドンナに思いを寄せるが結局は失恋、柴又に帰り妹に旅の話をする。妹役は倍賞千恵子。昭和四十四年から四十八作の人気ドラマ。秋祭に句の作者もふとドラマを思い、自分の妹を心配したのかも。

夕風に
のって届く音
秋祭

ゆーみん

一般に秋祭は収穫祭のことで、農村に多く豊作など神に感謝し自分達も祝う。私の田舎の島根では山の中腹の神社で一晩中石見神楽を奉納する。夕方になり神社の神事の太鼓や笛が聞こえると、夜食を持ち連立って出掛けだし、また出店なども懐かしい句です。

特選句

特選句

特選句



今月の秀逸句

秋祭
遠く聞ゆる
囃子かな

みく
秋祭や盆踊りなどあると、遠くから囃子の音が聞こえる。ことに踊りなどは歌や囃子をスピーカーで流すので、見物の心を誘う。今では神社で五穀豊穰を祝うのと合わせて町の催し物も行い、商売の盛り上げをするので余計に賑わう。私にも「折々の田風に聞ゆ盆太鼓」があり懐かしい句です。

秋祭り
露店の並ぶ
校舎裏

くり
祭や盆踊り、七夕などには夜店や露店などで賑わう。田舎では神社への道に露店が出たが、この詠は少し大きな町かも。校舎裏に道路が広場があり、そこに露店が並ぶ。子供達にも慣れた道で行き易く、楽しい思いの句です。

最上川
朝より晴れて
芋煮会

しげ
原句は少し変えましたが、これで山形の芋煮会の景が見える詠になります。芋煮会は江戸時代に米の不作に備えて里芋の栽培を奨励したのが始まりで家族、友人、集落の親睦が目的と言われる。一九八〇年頃旅館などで観光商品化され今に至る。山中町が発祥とも言われ、大鍋を河原に据えての芋煮会は圧巻でもある。

赤とんぼ
背中に乗せて
稲を刈る

あべ
蜻蛉はよく人の肩や帽子釣竿などに止るので親しい。ことに田圃には多く居るので、稲刈りの背にも来る。夏茜、秋茜、深山茜、などの種があるが深紅なのは雄と言う。今は稲刈りも機械だが、これは手刈の詠で昔が懐かしい句です。

秋祭り
法被華やぐ
神社かな

くま
法被には仕事用と行事に着るのがあり、祭りなどは背に祭の字を染めたのが多い。神輿を担ぐ人、参道の係の人などが着て華やぐ。今では子供、女子用などあつて可愛い。神輿の準備が法被の人が集まり神社も賑わう実感の句です。

我が姓は
吾で了りや
秋の鮎

ゆたか
姓氏、苗字は漢字文化圏の血縁集団の名称で、日本へは中国から伝わり、五世紀頃から広まって平安時代に世襲化されたとも。階級、地名、職業など表し、明治八年義務化された。明治以前は一般人は姓が無いといわれるが、八割は有ったが公表出来なかつたとも。鮎は年魚とも言一年で生涯が了る。それに似て家系が自分の代で了るのは諸々の思いに淋しい句です。

佳作

秋祭なにか楽しい明日を待つ	かよこ	秋祭たこ焼き食うてあー美味し	アツチャン
秋祭どこか寂しい帰り道	あきら	秋祭広田の風もこちち良し	しの
コスモスの綺麗にならぶ散歩道	ゆうこ	夏祭終えて早や立つ秋の風	いるか
夕日見て稲穂のゆれる利根堤	まこ	思い出す山の故郷秋祭り	こば
秋祭田舎の祖父母待っててね	ちやこ	胸躍る子の日も待ちぬ秋祭	れいこ
コスモスに似てや河原の揚花火	めい	サンダルの色も涼しき足の爪	くり
秋祭担ぐ神輿に息弾む	みく	御神楽の笛にゆれぬる枯尾花	あべ
手塩かく広田の稔り秋祭	しま	順番を待たぬ死もあり夏の果て	ゆたか
今年もね豊作思う稲光	かこ		

どっこい

私も生きてます ~我が回復記~「ブーちゃんの回復記」

第10回

仕事の絶頂期と結婚生活から一転アル中人生の「どん底」に陥る

前回紙面の都合で休載したので、これまでの流れを簡単に振り返ります。

複雑な家庭環境や酒に親和性のある遺伝的な資質などを背景に、僕は小学生時代から始まった飲酒によって、若くしてアルコール依存症に陥りました。級友からは「酒臭い」と毛嫌いされ、高校は中退。その後はアルバイトで食いつなぎ、アルコールに支配された荒れた生活です。仕事も長続きせず、周囲からの立ち直りの期待をことごとく裏切り、家族を巻き込んで数多くのトラブルを引き起こし、一時はホームレスに身をやつしました。酩酊しておう吐物を手ですくって口にし、「なんだよ、これ酒じゃねえのか!」と周囲にわめき散らす狂った生活でしたから、世間から見たら「どん底」もいいところでした。その後は何とか立ち直りの機会を得ようと僕も必死でした。サラ金に追われ、一時は北海道への逃避行を試みましたが、僕のアル中人生には相変わらず好転する兆しが見えませんでした。

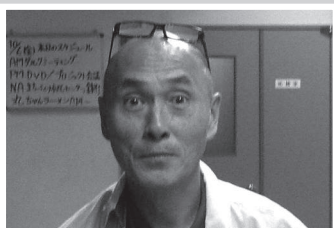
しかし2000年、僕が29歳の時に転機が訪れます。飲み屋で意気投合したある親方との出会いから、東京・神田にある老舗のもつ焼き店に職を得たのです。親方は僕の働きぶりを見込み、本店の指揮を任せてくれたのです。間もなく僕は、親方からその店の経営権を譲渡され、若くして経営者にまで上り詰めました。3000万円をこえる借金が僕の肩に重くのしかかりましたが、使命感とは凄いもので以前と同じように飲んでいても遮二無二に働けたのです。その甲斐あって、重度のアル中の僕がなんと店のお客だった女性と結婚もでき、愛娘も生まれました。まさに自力で地獄から這い上がった時期で、僕に訪れた束の間の幸福の期間でした。あれが僕にとっての人生の分岐点だったのかもしれない。

飲酒をしながらも店の経営は順調にみえましたが、やはり依存症はそんなに甘い病気ではありません。経営は順風満帆に見えても、プライベートではトラブルが絶えませんでした。早くから嫁は僕の「正体」が分かっていたようで、密かに心療内科に通って依存症家族の回復について勉強していました。やがて順調だった店の経営も、いつの間にか売り上げが下がり、僕は自社のお金にも手を付け始めていました。眠剤依存と酔いに任せて僕が包丁を自らの腹にあてたことで、嫁はついに「うちの人が狂った!」と判断、初めて精神科病院に入院しました。その後も家庭内でのトラブルは続き、嫁は堪忍袋の緒が切れて、ついに僕の元から離れて行きました。2009年秋の事です。嫁は家族の共倒れを防げず、共依存から抜け出すために一大決心をしたのでした。後で母から、嫁や娘に与えてしまった苦しみの実態を聞いた時には、さすがに僕もへこみました。話し合いによって僕の店は嫁の兄に譲渡することになり、僕は社会的な信用、経営者、夫、父親…、手にしていたものや立場をすべて失いました。その後5年間のうちに実に2年半に及ぶ入院をしていくとも知らずに…。

(次号に続く)

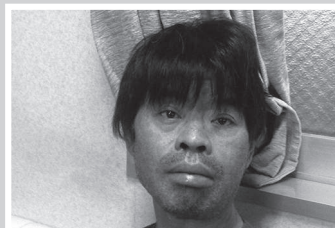
10月のバースデー

あお



いやーん

もっちゃん

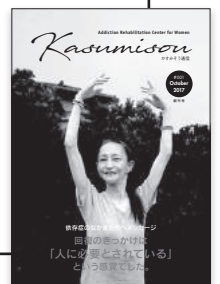


頑張ります。

女性のための回復施設 るみの家

ニュースレター Kasumisou

女性ハウス「るみの家」のニュースレター「Kasumisou」が刊行されます。まだ苦しんでいる女性の仲間は必読です。回復のメッセージをときにまじめに、ときに面白おかしく届ける内容となっています。11月に開催される潮騒12周年フォーラムでも配る予定です。ぜひご覧ください。



10月の行事予定

- 10月5日 潮騒俳句会
- 10月8日 新宿リカバリーパレード
「回復の祭典」
- 10月8・21日 秋元病院メッセージ
- 10月21・22日 鹿嶋祭り(潮騒エイサー演舞等)
- 10月22日 潮騒家族会
- 10月29日 潮騒アディクションセミナー

11月の行事予定

- 11月4・5日 て〜ら祭
(鹿嶋市まちづくり市民センター)
- 11月9日 潮騒俳句会
- 11月12・18日 秋元病院メッセージ
- 11月23日 潮騒12周年フォーラム&パレード

献金・献品を頂いた方 (10月15日現在)

- ・ 斎藤マリアテレサ 様
- ・ (株)鹿行シバウラ 様
- ・ 松嶋 定雄 様
- ・ 狩野 輝美 様
- ・ 富井 建夫・恵子 様
- ・ 黒川 奈菜子 様
- ・ 坂西 学 様
- ・ 小川 正徳 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを
実践することができておりますことをご報告いたします。

今後ともご支援くださいますよう、
なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありが
とうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させてい
ただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

今月号では潮騒のサポーターで竜ヶ崎市に住むジャーナリストの
崎山勝功さんが第8回リカバリーパレード「回復の祭典」を同行取材
し、依存症に理解を示す記者の目から記事を寄稿してくれた。彼の原
稿にはスペースの関係で入らない部分があり、この編集後記で以下掲
載します――。

◇ ◇ ◇

この原稿を書いている最中に、物まねタレントの清水アキラさんの
三男(29)が覚せい剤取締法違反(覚せい剤使用)の疑いで警視庁に
逮捕された、とのニュースが入ってきました。民放テレビの情報番組
では、父親である清水さんが報道陣に向けて涙ながらに三男の“不祥
事”を謝罪していましたが、清水さん自身も報道各社の芸能レポ
ーターも「薬物依存症は『脳の病気』であって「本人の意志の問題」では
ない」との認識が欠けているように感じました。覚せい剤使用は「犯
罪」という点を最大限考慮しても、薬物・アルコール等の依存症につ
いて、いまだに根強く残る「本人の意志の弱さ」との偏見を広める手助け
となり、依存症者の回復を遅らせる原因の一つになっています。でき
れば新聞社やテレビ局の報道責任者を対象に、薬物・アルコール依存
症についての研修会を開いてみては、と考えます。もし、清水さんの三
男が覚せい剤使用を悔いているのであれば、田代さんのようにダルク
に入って回復活動に励み、来年以降のリカバリーパレードに参加して
みては、と提案してみます。

◇ ◇ ◇

崎山さんの提案に僕も賛成するが、個人的に気になったのは本人を
突き放せない父親の姿だった。ワイドショーテレビで、涙ながらに
「(どんなに出来が悪くても) 家族ですから…」と息子の更生を下支え
する思いを口にした場面には違和感を抱いた。ご承知のように家族
が支え手になっている限り、本人は回復へと向かう「底つき」ができ
にくい。依存症の回復では家族の共依存もケアされる必要がある。
30歳に手が届くいい大人の尻拭いを家族にさせることを、無意識に
“脅迫”する社会も僕には十分に病的に思える。一人でもいいから「そ
れはおかしい。これは本人の問題だからあなたに責任はない」と助言
したり、同種事件で家族の下に押し掛ける“歪んだ正義感”を疑うレ
ポーターは現れないものか…。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2017年10号

Contents

- P② 「潮騒版 リカバリーパレード実施の意義について」
- P③ 農業隊収穫期リポート(下)
～ 仲間の回復を見捨てる事は自分の回復を見捨てる事～
- P④ リカバリーパレード
参加者の減少を食い止め、市民の関心を促すPR面での工夫を
- P⑥ 近藤恒夫インタビュー 第4回
「ダルクは人を正すのではなく、
間違いに寄り添っていく居場所だ」
- P⑧ 2017シリーズ企画「潮騒ジョブってどんな施設なの?」
その7: 「潮騒食堂「おらげのかまど」
- P⑨ ・ 独協医大生が潮騒の回復支援活動に理解深める
・ 赤い羽根共同募金で下津施設などにエアコン設置
- P⑩ 受刑者からの手紙
- P⑫ しおさい俳壇 10月のお題「秋」
- P⑭ どっこい私も生きてます「ブーちゃんの回復記」/ 10月のバースデー
- P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次



■ 編集・発行:

特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
(潮騒アディクション・ケアセンター)
〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

